九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドとリュシアン・ジャン

吉井，亮雄
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/9972

出版情報：Stella. 15, pp.143-153, 1996-07-01. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジッドとリュシアン・ジャン

吉　井　亮　雄

リュシアン・ジャン——1870年に生まれ，将来を嘱望されながら1908年に38歳の若さで病死した，ジッドと同世代の作家である。パリの下級官吏として日々の糧をえつつ，シャルル＝ルイ・フィリップとともに雑誌「ランクロ」の執筆陣にくわわることで文学活動を開始した。ついでフィリップ，レオン・フラピエ，ジャック＝ガブリエル・プロドムらと「オジュールデュイ」を創刊，さらに同誌終刊後は作品発表の場を「レルミタージュ」やベルギーの「アンテ」に求めた。政治的には無政府主義を標榜したのち，しだいに組合活動の熱烈な闘士へと転じていく。今日ではもはやその著作が話題にのぼることは稀で，作家としては忘れられた存在といえるが，にもかかわらず彼の名がわずかながらでも文学史のなかに記憶されるのは，なによりもフィリップとの親密な交友関係による[1)]。両者がたがいに抱きあった信頼の念，とりわけジャンにたいするフィリップのそれを証する事例にはこと欠かないが，ここではフィリップがアンリ・ヴァンドピュットに宛てた書簡の一節を引いておこう——「彼の知性は明晰にして深く，また人間的です。いく度となく彼はわたしの導き手となり支えとなってくれました。彼という人間のなかには光があるのです」[2)]。

ではジッドとの関係のほうはどのようなものだったのか。ジャン没後のジッドの言動から見て友好的な関係であったことは疑えないが，その具体相についてはほとんど判っていないというのが実状である。いつ知りあったのかという点からしてすでにそうだ。ジッドとフィリップとの出会いが1898年のことだから，それ以前に遡ることはないとしても，正確な時期となるとはっきりしない。また実際の交流においても，一歩ふみこんだ接触としてはただひとつ1902年の『背徳者』をめぐるやりとり——ジャンが「オジュールデュイ」で同著をかなり手厳しく評したが，ジッドはむしろこれをよろこび礼状を送った[3)]——が知られていたにすぎないのである。

かくのごとく全般にわたって情報不足が否めないだけに，最近もうひとつ別の接触を伝える新資料が発掘されたことはまことによろこばしい。2人が交わした書簡としてはこれまで4通の現存が確認されていたが（うちジッド書簡は上記の礼状のみ），新たにジャンの書簡が1通見つかり，フィリップ研究の第一人者デーヴィッド・ローによって印刷公表されたのである。本稿ではこの書簡を紹介しつつ，それが書かれた事情や以後の経緯を略述したい。ちなみに筆者は1992年公刊の拙著『ジッド「放蕩息子の帰宅」校訂版』[4] において，同書簡が存在する蓋然性は指摘したものの，自らの手で現物を見つけだすにはいたらなかった。そのようないきさつから新資料の紹介と分析を主眼とする本稿は必然的に拙著の補遺をかねる。この点をあらかじめ承知されたい。

*

まずは『放蕩息子の帰宅』にふれておこう[5]。この作品はカトリシスムへの回心を迫るクローデルやジャムへの否定的返答としてジッドが独自の福音書解釈を示したもので，1907年1月末から3月半ばにかけて執筆・推敲された。『背徳者』完成以後ながらくつづいた沈滞に終止符を打ち，『狭き門』（1909年）をはじめとする旺盛な創作活動の呼び水となったことでも知られる。初出はポール・フォール主宰の季刊誌「詩と散文」3－5月号（実際の出版は6月初め）だが，非売の初版として掲載テクストの抜き刷りが数十部だけ作られた。この初版が6月下旬に出来すると，キュヴェルヴィルに滞在中だったジッドはまちかねたかのように日をおかず，その一部いちぶに献辞をそえて友人や知己に郵送している。

具体的にはどのような面々が『放蕩息子の帰宅』を贈られたのか。全員を実証的に確定することは不可能に近いが，少なくともジッドがあらかじめ想定していた贈り先については，筆者が発見・同定した献呈予定者リストによってすでにあきらかになっている。このリストにはジッドの自筆でフィリップ，ヴァレリー，アンリ・ド・レニエ，レオン・ブルム，ポール・デジャルダン，オディロン・ルドン，レーモン・ボヌールなど，彼と交流のあった作家や詩人，画家，作曲家の名前が30ほど並ぶのだが，そのなかにジャンの名前も記されているのである。いっぽうこれらの献呈予定がそのまま実行にうつされた蓋然

性はかなり高い。礼状や署名入り献本の存在によって，実際に献呈を受けたと筆者が確認しえた約20名が，ベルギー人作家ジョルジュ・エカウトをのぞき，すべてリストのなかに見いだされるからである。このような状況から判断して筆者は上述のように，おそらくジッドはジャンに『放蕩息子の帰宅』を贈った，そしてジャンのほうも礼状を返した，と推測していたわけである。

結果的にこの推測は当たっていた。ローもジャン書簡を印刷公表するにさいし，拙著に言及しながらリストと書簡との密接な関連を認めている。さて，こういったところを前置きとして，さっそく問題の書簡を訳出・引用しよう。以下に掲げるのがその全文である[6)]——

1907年7月9日

ジッド様

放蕩息子は帰宅しました。しかし彼は外よりも家のなかでのほうが幸せになれるのでしょうか。彼は生の法則をいくつか知らずにいます。家というものを，屋根におおわれ四方を壁でかこまれた不変の場，とどまるべき場と見なしているのです。弱気になり，まさにこういった見方で自らを眺め，じっさい牢獄に閉じこめられているように感じるならば，彼にはもはや〔外界を〕知りたいという壮大ではあるが不毛で破滅的な欲求のほかにはなんの希望も欲望も残らなくなるでしょう。

放蕩息子が家のなかで生きることができるためには，彼自身がそれを望まなくてはなりません。家を愛し，家を変えなければなりません。この壁はもちろん彼を守ってくれるものなのですから，それを壊してはなりません。壁の石をひとつ外し，窓を作るのです。それが彼の生の意味となり目的となるでしょう。労働と継続のなかで一刻一刻が呼吸のように思考のようによきものになるのです。

こういう条件がみたされてこそ家は住みうるものになるのです。いずれの年代にあっても家を作りなおし，家がよきものであることを認識しなければなりません。

放蕩息子が倦み疲れて帰宅するというのはよくあることです。兄のほうは一度も家を出たことがないだけに，そしてとりわけ狭量な心の持ち主であるだけに，おそらくそれを悪いことと見なすでしょう。かまいはしません。大事なのは放蕩息子に家を建てうるだけの力があるということなのです。それは避難所としての家ではなく，たえず新たに作りなおさなければ崩れ落ちてしまう命の家なのです。

選ばなくてはなりません。家に住み，絶えまなく作りつづけるか，あるいは瞬間を追い求めて外で暮らすかを。そして瞬間を追い求める者にとってさえも，停止すべき時はいずれやって来ます。ファウストが瞬間にたいして「とどまれ，おまえはいかにも美しい」と呼びかけるように。そしてあまりに長く待ちつづけたばあいには，彼はファウストのように，まさにそのことばを発しながら滅びることになるのです[7)]。

わたしは2年前にこの帰宅を題材にした小さな物語を書きました。それを読みなお

してみましたが，あなたのかくも見事に充実した繊細で簡潔な散文を読んだあとでは，味わいに欠ける子供っぽいものに思われました（たしかにわたしはそれを子供向けに書いたのですが)。あなたの芸術のなんとすばらしいことか！

敬 具

リュシアン・ジャン

一読してわかるように，ここに書きつらねられたのは単なる儀礼のことばではない。同時代の読者の多くがそうであったようにジャンも，暗示と両義にとんだ『放蕩息子の帰宅』を己にひきよせ，自身の判断基準に照らしてあわせて真摯に読もうとしているのである。詳しくは次段落以降でふれるが，彼のばあい自らも同じ福音書寓話（ルカ，XV，15-32）に想をえた作品を書いていただけに，なおさらこの物語に無関心ではいられなかったはずだ。ただしジッドのように回心の誘いに惑うことはなかった彼にとって，問題となるのは宗教的な議論ではない。じっさい「家」は作者が批判の対象として共示したカトリシスムの文脈においてとらえられるのではなく，もっぱら個人の絶えまない生成の場という観点から論じられている。「家」の擁護ということでは立場を同じくする兄が斥けられるのも，帰依した教義の是非によるのではなく，ひとえにこの登場人物の頑迷な保守性と，権威への没個性的服従のせいなのである。かくのごとく固定や停滞を嫌ったジャンであるが，その信条はまた同時に「背徳者」的な姿勢とも大きく異なっていた。感覚の優位を信じて瞬間を追い求めた放蕩息子や末弟とともに欲望の賛歌を奏でるのはとうてい彼のなしうるところではない。いかに変化にとみ動的ではあっても，それは自らがめざす緩やかだが着実な日々の更新とは本質的に相いれないからである。組合活動家として現実に根ざした社会変革をすすめようとするジャンの面目はまさにこの点にあったといえるだろう。

1908年6月1日，ジャンはこの世を去る。結核との長く苦しい闘いのすえの死であった。訃報に接し「ふかい悲しみをおぼえた」ジッドはただちにジャンの既発表作品を一巻に編もうとフィリップに相談したようだ[8]。その後，フィリップは親友の遺稿のなかから福音書に題材をとった作品を見つけだす。タイトルもまさに『放蕩息子』。当然のなりゆきとして，この遺作はジッドのもとにもちこまれた。その間の経緯はすでによく知られているが，同年の9月末，フィリップはジッドにたいして以下のように提案したのである――

ぼくには，われわれの雑誌に発表してもいい短い原稿があるにはある。でもこの創刊号にはリュシアン・ジャンの短編を載せたほうがいいと思う。内容に見事なところのある作品で，題名は『放蕩息子の帰宅』だ（そうなんだぜ，きみ）。[9]

題名が『放蕩息子の帰宅』とあるのは，フィリップがジッド作品のそれと混同したためであろう[10]。しかしながらこの混同は，挿入句（原文は voui, mon vieux）の皮肉な調子が意味するところと無関係ではあるまい。というのは，すでに前年ジッドから『放蕩息子の帰宅』を贈られ，「きみにはひどくがっかりした」ではじまる率直な感想を書きおくっていたフィリップが[11]，同じテーマをあつかった親友の遺作を推すにあたり，その一件を意識しなかったとはとうてい考えられないからだ。また彼がここで「われわれの雑誌」と呼んでいるのは，いわゆるジッド・グループと，ウージェーヌ・モンフォール率いる「レ・マルジュ」誌グループとが合併した第1次「新フランス評論」のことである。この時点ではすでに紙面に余裕がなかったのか，11月15日付の創刊号には無署名のジャン追悼記事だけが載り，『放蕩息子』のほうは翌月号に掲載と予告されている。だが周知のように，2つのグループはマラルメ評価をめぐる意見の対立からたちまち決裂し，雑誌はたった1号であっけなく終刊となる。けっきょく『放蕩息子』が陽の目を見たのは，3カ月後の1909年2月，ジッドらのグループによって再度創刊された「新フランス評論」においてであった[12]。

ジャンがこの作品を書いたのは，彼自身も述べているように（書簡最終段落），ジッドの『放蕩息子の帰宅』が執筆・発表される2年前のことである。じっさい雑誌初出時にはテクスト末尾に執筆年として「1905年」と記されていた。ところがこの注は，作品が1910年刊のジャン著作集『人々のなかで』（後述）に収められるさいに「1908年」と誤記されてしまう[13]。さらに60年代にローザンヌのランコントル社から出た同書再版でも執筆年の誤りは正されることなく踏襲された。おそらくこういった事情のためであろう，2つの「放蕩息子」の前後関係を誤って逆転させ，その結果ジャンの福音書翻案をジッドのそれにたいする反駁と見なす研究者は現在でも少なくない。前出のローでさえジャン書簡の記述によってはじめて正確な事実を知ったとあかしているほどだ[14]。今さらことわるまでもないが，これら2作品のあいだに直接的な影響関

係と呼べるものは存在しないのである。

とはいえ，2つの「放蕩息子」が興味ぶかい一対であることにかわりはない。2人の同時代作家が期せずして同じ素材に関心を示したこと，完成された翻案はしかしながら互いに趣を大きく異にするものだったこと，そして彼らのいずれもが事後に相手の対照的な解釈を知ったこと，またおそらくはそれによって自らの視点をいくぶんなりとも相対化する機会をもったこと――以上を思えば，いかに間接的なかたちであるとはいえ，ひとつの文学的交換がそこにはたしかに成立していたからである。本稿では両作品を子細に比較検討する余裕はないが，ジャンの『放蕩息子』については上記書簡の理解をたすけるためにも，物語の筋立てを紹介したうえで内容上の特徴をいくつか指摘しておきたい。まずは梗概――

「悪童ではなかったが，彼にはひとつ欠点があった。世界は，なかでもとりわけ近親者たちは自分を喜ばせるために創造されたと信じこんでいたのだ」。裕福な家庭に育ち，学校の成績も優秀なだけになおさらそう信じこんでいた放蕩息子だが，成長するにつれて思いどおりにならないことがふえ，自分は不幸だと感じはじめる。生まれ育った村にも窒息感をおぼえることが多くなる。

こうして彼は，20歳をむかえたのを機に財産を分けてもらい，都会へむけて旅たつ。彼には大人物になりたいという漠然とした願望があるばかりで，具体的な方策はなにひとつない。やがて面白おかしく生きるほうへと流れはじめる。遊興にあけくれる彼には本当の友人もできない。やがて持ち金は底をついた。都会の生活に幻滅した彼に残された道はただひとつ，故郷の村に帰ることであった。

村の近くまで来たとき，子供のころの友人で，今は豚飼いを生業にしている男に出会い，その仕事をゆずりうける。この人もさげすむ卑しい職業につくうち，「にわかに彼は自分の存在の虚しさをさとった。彼には人生が今までとはちがう光のもとに見えてくる。小さな努力をするたびにその結果を求めてはならない，根気よく努力をつづけることが大切なのだ」。

ついに決心をかためた放蕩息子は，嵐の夜に帰宅する。父は雀躍し，母は涙をながしてよろこぶ。兄はそっけなく言う――「旅をするには絶好な日よりをえらんだな」。家のなかはなにひとつ変わっていない。「叡知はここで辛抱づよくわれわれを待ちつづけていたのである」。

翌日は日曜だった。父はいちばん肥った仔牛をほふらせ祝宴の準備をはじめる。兄だけは不満である。自分が旅から帰ったときには，父は雌鶏の一羽もほふってはくれなかったからだ。

まれに見る豪華な祝宴だった。仔牛のほかに雌鶏も一羽そえられた。会食者はみな

大いに食べ，飲んだ。放蕩息子もはじめは陽気にふるまっていたが，どうしたことか，しだいに憂鬱そうな顔を見せはじめる。彼のために切り分けられた美味しそうな仔牛にもほとんど手をつけていない。不審に思った父は問いかける――「いったいどうしたのかね。くつろげないのかい」。すると放蕩息子は耐えきれず答えるのだった――「ああ，お父さん！ あなたはわたしが牛は好きじゃないってことを思いだされるべきでした！」

梗概からだけではとらえにくいが，この物語の特徴としてまず指摘できるのは，語りのレベルで話者が主人公の放蕩息子にたいして常にある一定の距離をおいている点だろう。ニュートラルな語りといった印象をあたえる福音書寓話とも，また話者が涙をながし主人公の放蕩息子と熱く感情を共有するジッドの寓話とも異なる独自のスタンスといってよい。そこにどこかしら冷ややかな調子を感じとる読者も少なくあるまい。しかし作者ジャンが子供向けの物語を意図したことを思いおこせば，こういった話者の姿勢は主張すべきことをもたない無関心ではなく，むしろ放蕩息子のかつての愚行を穏やかにたしなめようとする視線のあらわれと見なすべきではないか。

物語が子供向けに書かれたことは，ジャンが通常とはちがって家出とその後の放浪生活だけではなく，放蕩息子の子供時代にもかなりのスペースを割いている事実にはっきりとうかがわれる（梗概第1段落の内容は実際には物語全体の約3分の1を占める）。また学校での成績優秀にたいする褒賞の十字架といった現代風の脚色や，なじみの深いおとぎ話の挿入によって子供たちの興味をひこうとする配慮にも欠けてはいない。こういった身近な話題をとおして子供たちに平易に語りかけられる教え――「小さな努力をするたびにその結果を求めてはならない，根気よく努力をつづけることが大切なのだ」。ここにおいて物語はジャンがジッドに宛てた書簡の内容と完全に符合するのである。

とはいえジャンの物語はありきたりの「モラリテ」では終わらない。落語の下げを思わせるその結末はたしかに皮肉なユーモアをふくんでいるが，皮肉の矛先は放蕩息子の教育を誤った父母にも向けられていると読めなくはない。ただ単に子供たちばかりか，彼らに物語を読んで聞かせるであろう親たちも教化の対象として想定されているのではあるまいか。

たしかにこの作品はジッドの寓話にくらべれば，作者自身もみとめるように「味わいに欠ける子供っぽいもの」に見える。文体や形式の芸術的な完成度，

主題の多様さや重要性，そのいずれをとっても『放蕩息子の帰宅』には大きくおよばない。これは否定しがたい事実である。しかしながらジッドが自我の探究に専念するあまり，この時点ではまだまだ現実社会にたいする認識に欠けるところがあったのにたいし，ジャンのほうは厳しい生活環境から導きだされた実践的な教訓を明確に提示している点はそれなりに注目されてよいだろう。

*

最後に，『放蕩息子』が「新フランス評論」に掲載されてのちジャンをめぐってどのような動きがあったかについて簡単にふれておこう。

ジッドがジャンの没後ただちにその作品を一巻に編もうとしたのは前述のとおりだが，実際に企画の中心となって動いたのはフィリップであった。「レ・マルジュ」は1909年3月号に，また「新フランス評論」は4月号に，彼をはじめモンフォール，エドモン・ピロン，アンドレ・リュイテルス，ジョルジュ・ヴァロワの連名で「リュシアン・ジャン友の会」結成の告知を載せ，著作集刊行の経費を捻出すべく企画への賛同者を募った[15]。序文はフィリップが担当する予定だったが，あろうことかその彼が同年末，腸チフスと髄膜炎にみまわれ急逝してしまう。代役をひきうけたのはヴァロワであった。「新フランス評論」は彼の書いた序文を翌1910年2月号に先行掲載して近刊予告の便宜をはかる[16]。このように不測の事態はあったもののジャンの著作集は，その思想を汲み『人々のなかで』と総題されて，まもなくメルキュール・ド・フランスから無事刊行されたのである[17]。

この本についてはジッドの義弟マルセル・ドルーアン（筆名ミシェル・アルノー）が「新フランス評論」同年7月号の書評欄で紹介したが[18]，ジッド自身も11月5日にサロン・ドートンヌでおこなったフィリップ追悼講演のなかで，2人の物故作家がいかに強い絆で結ばれていたかを証言しながら，ジャン文学そのものの意義や評価にふれている——

> わたしは自らの精神においても心情においてもこの2人の作家を切りはなしたくはありません。わたしの考えを率直に申しあげますと，リュシアン・ジャンはおそらくフィリップほど大きな作家ではありません，しかし（おそらくはそれゆえにこそ）彼

はよりいっそう完成した作家なのです。彼が遺したわずかばかりの作品は〔…〕後々まで残ることでしょう。それらは〔…〕『人々のなかで』という本になりました。〔…〕これは立派な本で，フィリップは序文を書きかけていたのですが，今度は彼自身が死に襲われてしまったのです。

わたしはフィリップがこの序文のためにとっていたノートを見たのですが，彼がとくに気にかけていたのは，いかにしてリュシアン・ジャンが深い正義の欲求にかられ導かれて，知性の完全な均衡に，きわめて独特な他者の理解に，教養に到達したのかを示すことだったのです〔…〕。[19]

また詳しい事情は不明だが，ベルギー人作家クリスチアン・ベック（当時はパリ在住）に宛てたある書簡によれば，この講演から数カ月後にジッドは，経済的に困窮していたジャンの遺児を援助しようと，商務省の大臣官房長だった友人ウージェーヌ・ルアールに仲介を依頼するなど，あれこれと尽力したようだ[20]。しかしながらそれを最後にジャンの名前はジッドの筆から完全に消えてしまう。公表を前提とした回想記の類はおろか，日記や書簡など私的な書き物においてもジャンが話題にのぼることは，筆者の承知するかぎり以後一度としてないのである。またリュイテルスやシュランベルジェ，ゲオン，コポーら「新フランス評論」の他のメンバーたちもこれといって彼をとりあげることはなかった。この事実をもってジッドのいうように「フィリップほど大きな作家ではない」ことの証左とすべきなのか。その正否はともかく，あわただしいパリ文壇にあっては心優しいジャンの思い出もやがて記憶の片隅へと追いやられていき，あとはただ彼と親しく交わったけっして多からぬ「人々のなかで」細々と語りつがれるほかはなかったのである。

註

1）マイナーな作家だけに，リュシアン・ジャン（ただしこれは筆名で，本名はリュシアン・デュードネ）にかんする研究はこれまでもほとんどなされていない。たしかにフィリップ研究ではしばしば彼の名が引かれるものの，大半はあくまでも『ビュ・ビュ・ド・モンパルナス』の作者を語るための言及であって，その内容も挿話的なレベルをこえることは稀である。また彼について書かれた唯一のモノグラフィーとして，セーヌ河畔の名物ブキニストだったルイ・ラノワズレによる『リュシアン・ジャン』(Louis Lanoizelée, *Lucien Jean*. Préface de Henry Pou-

LAILLE. Bois de Jean LEBEDEFF. Paris: Maurice Pernette, coll. «Plaisir du Bibliophile», 1952）があるが，これとて実際には紙数わずかな小冊子にすぎず，記述にも出版からすでに40年以上が経過した今となっては不備や不正確が少なからず目につく。

2）Lettre de Charles-Louis Philippe à Henri Vandeputte, du 23 juin 1899, *La N.R.F.*, 1er avril 1911, p. 602.

3）Voir l'article de Lucien Jean, *Aujourd'hui*, n° 4, août 1902, pp. 116-119 (repris dans le *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 20, octobre 1973, pp. 27-32) et la lettre de Gide au même, du 18 septembre 1902, *Les Amis de Charles-Louis Philippe*, bulletin n° 12, 1954, pp. 73-74 (reprise dans le *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 22, avril 1974, pp. 68-69).

4）André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Édition critique établie et présentée par Akio YOSHII. Fukuoka: Presses Universitaires du Kyushu, 1992.

5）以下2段落の記述内容について詳細は同拙著17-35頁，55-57頁および203-207頁を参照されたい。

6）David ROE, «Une lettre inédite de Lucien Jean à André Gide à propos du *Retour de l'Enfant prodigue*», *Les Amis de Charles-Louis Philippe*, bulletin n° 51, 1995, pp. 60-61.

7）この段落でジャンが言及しているのは，ファウストがメフィストフェレスと契約を結ぶさいに発するつぎの一節である――「わたしがある瞬間にたいして，とどまれ，おまえはいかにも美しいといったら，もう君はわたしを縛りあげてもよい，もうわたしはよろこんで滅びよう」（ゲーテ『ファウスト』，第1699-1702行）。また最終文は，約一万行ののちファウストが同様のことば――「そうなったら瞬間にたいしてこう呼びかけてもよかろう，とどまれ，おまえはいかにも美しい，と」（同，第11581-11582行）――を発して絶命することをふまえる〔引用者註〕。

8）D'après la lettre de Gide à Eugène Rouart, s.d. [juin 1906], reproduite dans *Les Amis de Charles-Louis Philippe*, bulletin n° 20, 1962, p. 507. 同日に書かれたフィリップ宛書簡そのものは未発見。

9）André GIDE, *Correspondance avec Charles-Louis Philippe et sa famille (1898-1936)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT. Lyon: Centre d'Études Gidiennes, Univ. de Lyon II, coll. «Gide / Textes» n° 11, 1995, p. 19.

10）『ジッド＝フィリップ往復書簡集』の校訂者マルチーヌ・サガエールはこの点にかんして，ジッドが自作との混同をさけるためにジャン作品の題名を『放蕩息子の帰宅』から『放蕩息子』に修正したのではないかと推測している（voir *ibid.*, p. 123, n. 6)。現時点では確実な証拠資料がないだけにこの推測の当否は決めがたいが，筆者としてはその可能性はきわめて小さいと考えている。その理由は第一に，故人の著作に，しかもその題名に編集者がみだりに（なんの注記も付さず）手を入

れたとは考えにくいこと。第二に，題名中の「帰宅 retour」という語はじっさいにはすぐれてジッド的な付加要素であって，福音書の寓話は通常ただ単に「放蕩息子」（あるいはドイツ語圏の「失われた息子」）と呼ばれてきたし，後世の数多い翻案の題名にしても事情は同じだったこと（voir Werner BRETTSCHNEIDER, *Die Parabel vom verlorenen Sohn. Das biblische Gleichnis in der Entwichlung der europäischen Literatur*. Berlin : Erich Schmidt Verlag, 1978），である。

11) Voir la lettre de Philippe à Gide, du 2 juillet 1907, in GIDE, *Correspondance avec Charles-Louis Philippe et sa famille (1898-1936)*, op. cit., p. 18.

12) Voir Lucien JEAN, «L'Enfant prodigue», *La N.R.F.*, février 1909, pp. 12-19.

13) Voir Lucien JEAN, *L'Enfant prodigue*, recueilli dans le volume intitulé *Parmi les hommes*, Paris : Mercure de France, 1910, pp. 39-48.

14) Voir ROE, *art. cité*, p. 62. Et aussi François TALVA, «André Gide, Lucien Jean et la parabole de l'Enfant prodigue», *Les Amis de Charles-Louis Philippe*, bulletin n° 22, 1964, p. 56 ; GIDE, *Correspondance avec Charles-Louis Philippe et sa famille (1898-1936)*, op. cit., p. 123, n. 6 (note de Martine SAGAERT).

15) Voir *Les Marges*, 6e année, n° 14, mars 1909, pp. 138-139, et *La N.R.F.*, n° 3, avril 1909, p. 317.

16) Voir Georges VALOIS, «Lucien Jean, 20 mai 1870-1er juin 1908», *La N.R.F.*, n° 13, février 1910, pp. 39-45. Et aussi la lettre d'André Ruyters à Jean Schlumberger, s.d. [début avril 1910], in André RUYTERS, *Œuvres complètes*. Édition établie et présentée par Victor MARTIN-SCHMETS. Lyon : Centre d'Études Gidiennes, Univ. de Lyon II, t. V [1990], pp. 292-293.

17) 版元としてメルキュール・ド・フランスが選ばれたのは，それまで同社がジッドの主要な版元だったことと無関係ではあるまい。ちなみに「新フランス評論」が単行書出版をおこなうのはこの翌年からのことで，最初はクローデル『人質』，ジッド『イザベル』，フィリップ『母と子』の3点が同時刊行された。

18) Voir M[ichel] A[RNAULD] (Marcel DROUIN), «*Parmi les hommes*, par Lucien Jean», *La N.R.F.*, n° 19, juillet 1910, pp. 115-118.

19) André GIDE, *Charles-Louis Philippe*. Conférence prononcée au Salon d'Automne le 5 novembre 1910. Paris : Eugène Figuière et Cie, 1911, pp. 24-25 (*Œuvres complètes*, Paris : Éd. de la N.R.F., t. VI [1934], pp. 155-156).

20) Voir la lettre de Gide à Christian Beck, du 24 mars 1911, in André GIDE et Christian BECK, *Correspondance*, établie, présentée et annotée par Pierre MASSON. Préface de Béatrix BECK. Genève : Droz, 1994, p. 271.